

女難

国木田独歩

青空文庫

今より四年前のことである、（とある男が話した）自分は何かの用事で銀座を歩いていると、ある四辻の隅に一人の男が尺八を吹いているのを見た。七八人の人がその前に立っているもので、自分もふと足を止めて聴く人の仲間に加わった。

ころは春五月の末で、日は西に傾いて西側の家並みの影が東側の家の礎から二三尺も上に這い上っていた。それで尺八を吹く男の腰から上は鮮やかな夕陽に照されていたのである。

夕暮近いので、街はひとしおの雑踏を極め、鉄道馬車の往来、人車の東西に駈けぬける車輪の音、途を急ぐ人足の響きなど、あたりは騒然紛然としていた。この騒がしい場所の騒がしい時にかの男は悠然と尺八を吹いていたのである。それであるから、自分の目には彼が半身に浴びている春の夕陽までがいかにも静かに、穏やかに見えて、彼の尺八の音の達く限り、そこに悠々たる一寰区が作られているように思われたのである。

自分は彼が吹き出づる一高一低、絶えんとして絶えざる哀調を聴きながらも、つらつら

彼の姿を^み見た。

彼は盲人^{めくら}である。年ごろは三十二三でもあろうか、日に焼けて黒いのと、垢^{あか}に埋^{うず}もれて汚ないので年もしかとは判じかねるほどであった。ただ汚ないばかりでなく、見るからして彼ははなはだやつれていた、思うに昼は街の塵^{ちまた}に吹き立てられ、夜は木賃宿の隅に垢^{ちり}じみた夜具を被^{かぶ}るのであろう。容貌^{かおたち}は長い方で、鼻も高く眉毛^{まゆげ}も濃く、額は櫛^{くし}を加えたこともない蓬^{ぼうぼう}々とした髪^けで半ばおおわれているが、見たところほどよく発達し、よく下品な人に見るような骨張ったむげに凸起^{とつき}した額ではない。

音の力は恐ろしいもので、どんな下等な男^{なん}女^{にょ}が弾吹しても、聴く方から思うと、なんとなく弾吹者その人までをゆかしく感ずるものである。ことにこの盲人はそのむさくるしい姿に反映してどことなく人品の高いところがあるので、なおさら自分の心を動かした、恐らく聴いている他の人々も同感であつたろうと思う。その吹き出づる哀樂の曲は彼が運命^{つた}拙なき身の上の旧歡今悲を語るがごとくに人々は感じたであらう。聴き捨てにする人は少なく、一銭二銭を彼の手に握らして立ち去るが多かつた。

同じ年の夏である。自分は家族を連れて鎌倉に暑さを避け、山に近き一小屋を借りて住んでいた。ある夜のこと、月影ことに冴えていたので独り散歩して浜に出た。

浜は昼間の賑わいに引きかえて、月の景色の妙なるにもかかわらず人出少し。自分は小川の海に注ぐ汀に立つて波に砕くる白銀の光を眺めていると、どこからともなく尺八の音が微かに聞えたので、あたりを見廻わすと、笛の音は西の方、ほど近いところ、漁船の多く曳き上げてあるあたりから起るのである。

近づいて見ると、はたして一艘の小舟の水際より四五間も曳き上げであるをその周囲を取り巻いて、ある者は舷に腰かけ、ある者は砂上にうづくまり、ある者は立ちなど、十人あまりの男女が集まっている、そのうちに一人の男が舷に倚って尺八を吹いているのである。

自分は、人々の群よりは、離れて聴いていた。月影はこんもりとこの群を映している、人々は一語を発しないで耳を傾けていた。今しも一曲が終わったらしい、聴者の三人は立ち去った。余の人々は次の曲を待っているけれど吹く男は尺八を膝に突き首を垂れたまま身動きもしないのである。かくしてまた四五分も経った。他の三四人がまた立ち

去つた。自分は小船に近づいた。

見ると残っている聴者の三人は浜の童の一人、村の若者の二人のみ、自分は舷に近く笛吹く男の前に立つた。男は頭かしらを上げた。思いきや彼はこの春、銀座街頭に見たるその盲人ならんとは。されど盲人なる彼れの盲目めくらならずとも自分を見知るべくもあらず、しばらく自分の方を向いていたが、やがてまた吹き初めた。指端したんを弄して低き音の縷いとのごときを引くことしばし、突然中止して船端ふなばたより下りた。自分はいきなり、

「あんまさん、私の宅うちに来て、少し聞かしてくれんか」

「ハイ、ハイー」と彼は驚いたように言つて急に自分の顔を見て、そしてまた頭を垂れ首を傾け「ハイ、どちら様へでも参ります」

「ウン、それじゃ来ておくれ」と自分は先に立つた。

「お前の眼は全く見えないのかね」と四五歩にして振り返りさま自分は問うた。

「イイエ、右の方は少し見えるのでございます」

「少しでも見えれば結構だね」

「へエ、へへへへ」と彼は軽かろく笑つたが「イヤなまじすこしばかり見えるのもよくございませぬ、欲が生ましてな」

「オイ橋だぞ」と溝みぞにかけし小橋に注意して「けれども全く見えなくちやアこんなところまで来て稼かせぐわけにゆかんではないか」

「稼ぐのならようございませうが流がすので……」

「お前どこだい、生まれは」

「生まれは西でございませう、へい」

「私はお前をこの春、銀座で見たことがある、どういふものかその時から時々お前のことを思いだすのだ、だから今もお前の顔を一目見てすぐ知った」

「へいそうでございませうか、イヤもう行き当りばったりで足の向き次第、国々を流して歩くのでございませうからどこでどなた様に逢あいますことやら……」

途みちで二三の年若い男女に出遇であった。軽雲一片月をかざしたのであたりはおぼろになった。手風琴の軽い調子が高い窓から響く。間もなく自分の宅うちに着いた。

三

縁えんがわ辺に席を与えて、まず麦湯一杯、それから一曲を所望した。自分は尺八のことには

まるで素人であるから、彼が吹くその曲の善し悪し、彼の技の巧拙はわからないけれども、心をこめて吹くその音色の脈々としてわれに迫る時、われ知らず凄動したのである。泣かんか、泣くにはあまりに悲哀深し、吹く彼れはそもそもなんの感ずることなきか。

曲終れば、音を売るものの常として必ず笑み、必ず謙遜の言葉の二三を吐くなるに反して、彼は黙然として控え、今しもわが吹き終った音の虚空に消えゆく、消えゆきし、そのあとを逐うかと思わるるばかりであった。

自分は彼の言葉つき、その態度により、初めよりその身の上に潜める物語りのあるべきを想像していたから、遠慮なく切りだした。

「尺八は本式に稽古したのでらうか、失敬なことを聞くが」

「イイエそうではないのでございます、全く自己流で、ただ子供の時から好きで吹き慣らしたというばかりで、人様にお聞かせ申すものではないのでございます、ハイ」

「イヤそうでない、全くうまいものだ、これほど技があるなら人の門を流して歩かないでも弟子でも取った方が楽だろうと思う、お前独身者かね？」

「ハイ、親もなければ妻子もない、気楽な孤独者でございます、ヘッヘヘヘ」

「イヤ気楽でもあるまい、日に焼け雨に打たれ、住むところも定まらず国々を流れゆくな

ぞはあまり気楽でもなからうじやアないか。けれどもいずれ何か理由いわれのあることだろうと思う、身の上話を一ツ聞かしてもらいたいものだ」と思いきって正面から問いかけた。人の不幸や、零落につけこんで、その秘密まで聞こうとするのは、決して心あるものものすることでないとは承知しながらも、彼に二度まで会い、その遇うた場所と趣とが少からず自分を動かしたために、それらを顧慮することができなかつたのである。

「ヘイ、お話ししてもよろしゅうございます。今日はどういふものかしきりと子供の時のことを思い出して、さきほども別荘の坊ちやまたちがお庭の中で声を揃そろえて唱歌を歌つておいでになるのを聞いた時なんだか泣きたくなりました。

私の九ここのつ十とおのころでございます、よく母に連れられて城下から三里奥の山里に住んでいる叔母の家を訪ねて、二晩三晩泊つたものでございます。今日もちょうどそのころのことを久しぶりと思い出しました。今思うと、私が十七八の時分ひとが尺八を吹くのを聞いて、心をむしられるような気がしましたが、今私が九つや十の子供の時を思い出して堪たまらなくなるのと同じ心持でございます。

父には五つの歳に別れまして、母と祖母ばばとの手で育てられ、一反ばかりの広い屋敷に、山茶花さざんかもあり百日紅さるすべりもあり、黄金色の荔枝れいしの実が袖垣そでがきに下っていたのは今も眼の先に

ちらつきます。家と屋敷ばかり広うても貧乏士族で実は喰うにも困る中を母が手内職で、子供心にはなんの苦労もなく日を送っていたのでございます。

母も心細いので山家の里に時々帰えるのが何よりの楽しみ、朝早く起きて、淋しい士族屋敷の杉垣ばかり並んだ中をとぼとぼと歩るきだす時の心持はなんとも言えませんでした。山路三里は子供には少し難儀で初めのうちこそ母よりも先に勇ましく飛んだり跳ねたり、田溝の鮎ふなに石を投げたりして参りますが峠なかつにかかる半ほどでへこたれてしまいました。それを母が励まして絶頂の茶屋に休んで峠餅とうげもちとか言いまして茶屋の婆おばが一人ぎめの名物を喰わしてもらうのを楽しみに、また一呼吸ひといきの勇氣を出しました。峠を越して半ほどまで来ると、すぐ下に叔母の村里が見えます、春さきは狭い谷々に霞かすみがたなびいて画のようでございました、村里が見えるともう到いた気きでその路傍みちばたの石で一休みしまして、母は煙草たばこを吸い、私は山の崖がけから落ちる清水を飲みました。

叔母の家は古い郷士で、そのころは大分家産が傾いていたのですが、それでも私の目には大変金持のように見えたのでございます。太い大黒柱や、薄暗い米倉や、葛かつらの這い上った練堀ねりべいや、深い井戸が私には皆なありがたかったので、下男下女が私のことを城下の旦那様と言ってくれるのがうれしかったのでございます。

けれども何より嬉しくつて今思いだしても堪りませんのは同じ年ごろの従兄弟と二人で遊ぶことでした。二人はよく山の峡間の溪川に山を釣りに行ったものでございます。山岸の一方が淵になつて蒼々と湛え、こちらは浅く瀬になつていますから、私どもはその瀬に立つて糸を淵に投げ込んで釣るのでございます。見上げると両側の山は切り削いだように突つ立つて、それに雑木や楮松が暗く茂つていますから、下から瞻ると空は帯のようなのです。声を立てると山に響いて山が唸ります、黙つて釣っていると森としています。

ある日ふたりは余念なく釣つていますと、いつの間にか空が変わつて、さつと雨が降つて来ました。ところがその日はことによく釣れるので二人とも帰ろうと言わないのです。太い雨が竿に中る、水面は水煙を立てて雨が跳ねる、見あげると雨の足が山の絶頂から白い糸のように長く条白を立てて落ちるのです。衣服はびしょぬれになる、これは大変だと思ふ矢先に、グイグイと強く糸を引く、上げると尺にも近い山の紫と紅の条のあるのが釣れるのでございます、暴れるやつをグイと握つて籠に押し込む時は、水に住む魚までがこの雨に濡れて他の時よりも一倍鮮やかで新しいように思われました。

『もう帰えろうか』と一人が言つて此方をちよつと向きますが、すぐまた水面を見ます。

『帰ろうか』と一人が答えますが、これは見向きもしません、實際何を自分で言ったのかまるで夢中なのでございます。

そのうちに雷がすぐ頭の上で鳴りだして、それが山に響いて山が破裂するかと思うような凄いな音がして来たので、二人は物をも言わず糸を巻いて、籠びくを提さげるが早いかドンドン逃げだしました。途中まで来ると下男が迎えに来るのに逢いましたが、家に帰ると叔母おばと母とに叱しかられて、籠を井戸ばたに投げ出したまま、衣服を着更えすぐ物置のような二階ひとまの一室に入り小さくなつて、源平盛衰記の古本を出して画を見たものです。

けれども母と叔母はさしむかいでも決して笑こころい転ころげるようなことはありません、二人とも言葉の少ない、物案じ顔の、色つやの悪い女でしたが、何か優しい低い声でひそひそ話し合っていました。一度は母が泣き顔をしている傍そばで叔母が涙ぐんでいるのを見ましたが私は別に気にも留めず、ただちよつとこわいような気がしてすぐと茶の間を飛び出したことがあります。

私は七日も十日も泊っていたのでございますが、長くて四日も経ちますと母が帰ろうと言いますので仕方なしに帰るのでございます。一度は一人残っていると強情を張りましたので、母だけ先に帰りましたが、私は日の暮れかかりに縁先に立っていますと、叔母の

家は山に拠つて高く築きあげてありますから山里の暮れゆくのが見下されるのです。西の空は夕日の余光なごりが水のように冴さえて、山々は薄墨の色にぼけ、蒼い煙あおが谷や森の裾すそに浮いています、なんだかうら悲しくなりました。寺の鐘までがいつもとは違うように聞え、その長く曳ひく音が谷々を渡つて遠く消えてゆくのを聞きましたら、急に母が恋しくなつて、なぜ一しよに帰らなかつたらう、今時分は家に着いて祖母おばアさんと何か話してござるだろうなど思いますと堪らなくなつて叔母にこれからすぐ帰えると云いだしました。叔母は笑つて取り合つてくれませんが、そのうちに燈火あかりが点つく、従兄弟と挾はさみ将棊しょうぎをやるなどするうちにいつか紛れてしまいました、次の日は下男に送られすぐ家に帰りました。

また母と一しよに帰る時など、二人とも出かける時ほどの元気はありませんで、峠を越す時、母は幾度となく休みます。思い出しますのはその時の母の顔でございます。石に腰をおろしてほつと呼吸いきを吐ついて言うに言われん悲しげな顔つきをします、その顔つきを見ますと私までが子供心にも悲しいような気がしまして黙つてつくねんと母の傍そばに腰をかけたのでございます。そうすると母が、『お前腹がすきはせんか、腹がすいたら餅をお喰べ、出して上げようか』と言つて合財囊がっさいぶくろの口を開きかけます。私が、『腹はすかない』と言えば、『そんなことを言わないで一つお喰べ、おつかさんも喰べるから』と言つ

て無理に餅をくれます。そうされますと、私はなぜかなお悲しくなつて、母の膝にしがみついて泣きたいほどに感じました。

私は今でも母が恋しくつて恋しくつて堪らんのでございます」

盲人は懐旧の念に堪えずや、急に言葉を止めて頭を垂れていたが、しばらくして（聴者ききての誰人たれなるかはすでに忘れはてたかのごとく熱心に）

「けれどもこれはあたりまえでございます、母はまるで私のために生きていましたので、一人の私をただむやみと可愛がりました。めつたに叱つたこともありませんが、たまさか叱りましてもすぐに母の方から謝あやまるように私の気嫌を取りました。それで私は我わが儘ままな剛情者に育ちましたかと言うにそうではないので、腕白者のすることだけは一通りやりながら気が弱くて女のようなところがあつたのでございます。

これが昔氣質ばばの祖母ばばの氣に入りません、ややともすると母に向いまして、『お前があんまり優しくするから修葺しゆきまでが氣の弱い児になつてしまふ。お前からしても少ししつかりして男は男らしく育てんといけませんぞ』とかく言つたものです。

けれども母の性うまれつき質しつとしてどうしても男は男らしくというような烈はげしい育て方はできないのです。ただむやみと私が可愛いので、先から先と私の行く末を考えては、それを幸し

福あわせの方には取らないで、不幸せなことばかりを想い、ひとしお私がふびんで堪らないの
でございました。

ある時、母は私の行く末を心配するあまりに、善教寺という寺の傍そばに店を出していた怪
しい売うらないしや卜者のところへ私を連れて参りました。

売卜者の顔はよく憶おぼえております、丸顔の眼の深く落ちこんだ小さな老人で、顔つきは
薄気味悪うございましたが母と話をするその言葉つきは大変に優しくつて丁寧で、『アア
さようかな、それは心配なことで、ごもつともごもつとも、よく私が卜みて進ぜます』とい
う調子でございました。

老人は私の顔を天眼鏡で覗のぞいて見たり、筮ぜいちく竹をがちやがちやいわして見たり、まるで
人相見と八卦見はっけみと一しよにやっていますましたが、やがてのことに、

『イヤ御心配なさるな、この児さんは末はきつと出世なさるる、よほどよい人相だ。けれ
ど一つの難がある、それは女難だ、一生涯女に気をつけてゆけばきつと立派なものになる』
と私の頭を撫なでまして、『むむ、いい児だ』としげしげ私の顔を見ました。

母は大喜びに喜こびまして、家に帰えるやすぐと祖母にこのことを吹聴しましたところ
が祖母は笑いながら、

『男は剣難の方がまだ男らしいじやないか、この児は色が白うて弱々しいからそれでト
者いしやから女難があると云われたのじや、けれども今から女難もあるまい、早くて十七八、
遅くとも二十はたちごろから気をつけるがよい』と申しました。

ところが私にはその時（十二でした）もう女難があつたのでございます。

ここまでお話ししたのでございますから、これから私の女難の二つ三つを懺悔ざんげいたしま
しよう。売卜者はうまく私の行く末を卜うらない当てたのでございます。

そのころ、私の家から三丁ばかり離れて飯塚という家がありました。がその娘におさ
よと申しまして十五ばかりの背せいのすらりとして可愛らしい児がいました。

その児が途みちで私を見るときつとうちに遊びに来いと言うのです。私も初めのうちは行き
ませんでした。があまりたびたび言うので一度参りますると、一時間も二時間も止めて還かえ
ないで膝の上に抱き上げたり、頸くびにかじりついたり、頭の髪を丁寧かに搔かき下してなお可愛
くなつたとその柔らかな頬ほおを無理に私の顔に押しつけたり、いろいろな真似をするのでご
ざいます。

そうすると私もそれが嬉れしいような気がして、その後はたびたび遊びに出かけて、お
さよの顔を見ないと物足りないようになりました。

そのうち、売卜者から女難のことを言われ、母からは女難ということの講釈を聞かされましたので、子供心にも、もしか今のが女難ではあるまいかと、ひどくこわくなりましたが、母の前では顔にも出さず、ないない心を痛めていながらも時々おさよのもとに遊びに参りましたのでございます。

今から思いますと、やはりそのころ私はおさよを慕うていたに違いないのです、おさよが私を抱いて赤児扱あかんぼいにするのを私は表面うわべで嫌がりながら内々はうれしく思い、その温たかな柔らかい肌はだで押しつけられた時の心持は今でも忘れないのでございます。女難といえばその時も女難かかに罹かかつていたといつてもよろしゅうございましょう。

母は毎日のように、女はこわいものだという講釈をして聴かし、いろいろと昔の人のことや、城下の若い者の身の上などを例えに引いて話すのでございます。安珍あんちん清姫きよひめのことまで例えに引きました。外面げめん如菩薩によぼさつ 内心にんしん如夜叉にょしゃ などという文句は耳にたこのでできるほど聞かされました、なんでも若い女と見たら鬼か蛇じゃのように思うがよい、親切らしいことを女が言うのは皆な欺たますので、うかとその口に乘ろうものならすぐ大難に罹かかりますぞよというのが母の口癖でありましたのでございます。

私は母を信仰していましたから母の言うことは少しも疑いませんでした。それですから

おさよも事によつたら内心如夜叉ではないかとこわがりながらも、自分で言いわけをこしらえて、おさよさんはまだ子供だし自分もまだ子供だからそんなこわいことはない、おさよさんが自分を可愛がるのは真実に可愛がるので決して欺すのじゃあないところという風に考えていたのでございます。

ところがある日、日の暮に飯塚の家の前を通るとおさよが飛び出して来て、私を無理に引っ張り込みました。そしてなぜこの四五日遊びに来なかつたと聞きますから、風邪を引いたといいますが、それは大変だ、もう癒つたかと、私の顔を覗きこんで、まだ顔色がよくない、大事になさいよ修さんが病氣になつたら私は死んでしまうと云つてじつと私の眼を見るのでございます。私は気が弱うございますからこういわれますとなんだかうれしいやら悲しいやらツイわれ知らず涙ぐみました、それを見ておさよは私を抱きかかえましたが見るとおさよも眼に一杯涙をもっているのです。そして今夜は泊れおつかさんの代りに私が抱いて寝てあげるからといひます。おつかさんに叱られるからいやだと申しますと、おつかさんには私が今往つて謝つて来るからかまわないといひます。その時私が、もし母上に言つたらなお叱られる、おさよさんのところへ遊びに来るのも内証なんだからと小声で言いましたら、いきなり私を突き離して、なぜ内証で来るの、修さんと私と遊んじ

やア悪いの、悪いのならもう来なくつてもようござんすよと、こわい顔をして私を睨みつけたのでございます。私は慄るい上つて縁がわから飛び下り、一目散に飯塚の家から駆け出しました。

それからというものは決して飯塚に参りません、おさよに途中で逢つても逃げ出しました。おさよは私の逃げ出すのを見ていつもただ笑っていましたから、私はなおおさよが自分を欺しかけていたのだと信じたものでございます。

四

次の女難は私の十九の時でございます。この時はもう祖母も母も死んでしまい、私は叔母の家の厄介になりながら、村の小学校に出してもらつて月五円の給料を受けていました。祖母の亡くなつたのは十五の春、母はその秋に亡くなりましたから私は急に孤児になつてしまい、ついに叔母の家に引き取られたのでございます。十八の年まで淋しい山里にいて学問という学問は何にもしないでただ城下の中学校に寄宿している従兄弟から送つて寄こす少年雑誌見たようなものを読み、その他は叔母の家に昔から在つた源平盛衰記、

太平記、漢楚軍談、忠義水滸伝かんそくぐんだん ちゆうぎすいこてんのようなものばかり読んだのでございます。それからから小学校の教師さえも全くは覺束ないのですけれど、叔母の家が村の旧家で、その威光で無理に雇ってもらったという次第でございました、母の病氣の時、母はくれぐれも女に氣をつけると、死ぬる間際まぎわまで女難を戒しめ、どうか早く立身してくれ、草葉の蔭から祈っているぞと言って死にました。けれどもどうして立身するか、それはまるで母にも見当がつかなかったのでございます。母は叔母の家から私の学資を出さそうとしたらしゅうございました。これが都合よく参りませんものですから、私の立身を堅く信じながらも、ただそれは漢はくとしたことで、実は内々ひどく心痛したものと見えます。それですから母としてはただ女難を戒しめるほかに私の立身の方法はなかったのでございます。私はまたうまれつき意氣地がないのかして、自分の立身のことにはどういものかあまり氣をかけませんでした。ただ母に急に別れたので、その当坐の悲しさ、一月二月は叔母の家にも、どうかすると人の見ぬところで、めそめそ泣いておりました。

月日の経つうちに悲しみもだんだん薄らぎ、しまいには時々思い出すぐらいのことで、叔母の親切にほだされ、いつしか叔母を母のように思うて日を送るようになったのでございます。

十八の歳から、叔母の家を五丁ばかり離れた小学校に通つて、同僚の三四人とともに村の子供の世話をして、夜は尺八の稽古に浮身をやつし、この世を面白おかしく暮すようになりしました。尺八の稽古といえは、そのころ村に老人としよりがいました、自己流の尺八を吹いていましたのを村の若い者が煽おだつてて大先生のようにいいふらし、ついに私もその弟子分になつたのでございます。けれども元大先生からして自己流ですから弟子も皆な自己流で、ただむやみと吹くばかり、そのうち手が慣れて来れば、やれ誰が巧いとか拙ますいかてんで評判をし合つて皆なで天狗てんぐになつたのでございます。私の性うまれつき質つぎでありましようか、私だけは若い者の中でも別段に凝こり固まり、間まがな隙すきがな、尺八を手にして、それを吹いてさえいれば欲も得もなく、朝早く日の昇のぼらぬうちに裏の山に上がつて、岩に腰をかけて暁の霧を浴びながら吹いていますと、私の尺八の音でもって朝霧が晴れ、私の転まろばす音につれて日がだんだん昇るようにまで思つたこともあつたのでございます。

それですから自然と若い者の中でも私が一番巧いということになり、老先生までがほんとに稽古すれば日本一の名人になるなどとそそのかしたものです。そのうち十九になりました。ちようど春の初めのことでございます。日の暮方で、私はいつもの通り、尺八を持つて村の小川の岸に腰をかけて、独り吹き澄ましていますと、後から『修蔵様』と呼ぶも

のがあります。振りかえつて見ると武之允たけのじょうといういかめしい名を寺の和尚から付けてもらった男で隣村に越す坂の上に住んでいる若い者でした。

『なんだ。武之允 山城守やましろうのかみ』

『全く修蔵様は尺八が巧いよ』とにやにや笑うのです。この男は少し変りもので、横着もので、随分人をひやかすような口ぶりをする奴ですから、『殴るぞ』と尺八を構くわえて喝おどす真似をしますと、彼奴急きやつに真面目になりました、

『修蔵様には是非見てもらいたいものがあるんだが見てくれませんか』と妙なことを言い出したのでございます。変に思いました、

『なんだろう、私に見てもらいたいというのは』

『なんでもいいから、ただ見てもらえばいいのだ』

『どんなものだい、品物かい』と問いますと武の奴、妙な笑いかたをして、

『あなたの大きいなものだ』

『手前はおれをなぶるなッ』

『なぶるのじゃアない、全く見てもらいたいのでござんす。私のお頼みだから是非見てやうて下さい』と今度はまた大真面目に言うのでございます。

『よろしい、見てやろうから出せ』

『出せつて、今ここにはありません、ちよつと私の家へ来てもらいたいのでございませが』
 『お家の宝、なんとかの剣という品物かな』と私がいいますと今度また妙に笑い出しまし
 て、

『まずそんな物でございませ、何しろ宝にや相違ないのだから、ウンそうだ、宝でござい
 ませ』と手を拍ちますので私も不思議で堪りません、私の方からも見たくなりましたから、
 『それじゃこれから一緒に行こう、サア行つて見てやろう』とそれから二人連れ立ちまし
 て、武の家に参りました。

前に申しました通り武の家は小さな坂の頂にあるのでございませ。叔母の家からは七八
 丁もありましようか、その坂の下に例の尺八の大先生が住んでるのでございませから私
 も坂の下までは始終参りますが、坂に登つたことは三四度しかありません。この坂を越し
 ますと狭い谷間でありまして、そこに家が十軒とはないのです。だからこの坂を越すもの
 は村の者でもたくさんはないのでございませ。武の家は一軒の母屋おもやと一軒の物置とありま
 すが物置はいつも戸がしめき切つてあつてその上にがけ碓から大きなかし檜の木がおつかぶさつていま
 すから見るからして陰気なのでございませ。母屋も広い割合には人氣がないかと思われ

ばかり、シンとしているのです。家にむかいあつた畦の下に四角の井戸の浅いのがありまして、いつも清水を湛えていました。総体の様子がどうも薄気味の悪いところで、私はこの坂に来て、武の家の前を通るたびにすぐ水滸伝の麻痺薬しびれぐすりを思い出し、武松ぶしょうがやられましたじゆうじは十字坡などを想い出したくらいです。

それですが、武から妙なことを言われて大いに不思議に思っている上に武の家に連れてゆかれますのですから、坂を上りながらも内々薄気味が悪くなって来たのです。途々、武に何を見せるのだと聞きましたも、武はどうしても言わないばかりか、しめたという顔つきをして根性の悪い笑い方をするのでございました。

日はすっかり暮れて、十日ごろの月が鮮やかに映さしていましたが、坂の左右は樹しげが繁しげつていますから十分光が届かないのでございます。上りは二丁ほどしかありません、すぐ武の家の前に出ました。家の前は広くなって樹の影がないので月影はつきりと地に印していました。

障子あかりに燈火がぼんやり映つて、家の内はひっそりとしています。武は黙つて内庭に入りました。私は足が進みません、外でためらっていますと、

『お入りなされ！』と暗いところで武が言いました。

その声は低いけれども底力があって、なんだか私を命令するようでした。

『ここで見てやるから持つて来い』と私は外から言いました。

『お入りなされと言うに！』と今度はなお強く言いましたので私も仕方がないから、のっそり内庭に入りました。私の入ったのを見て、武は上にあがり茶の間の次ぎに入りました。しばらく出て参りません、その様子が内の誰かところこそ話をしているようでした。間もなく出て参りまして、今度は優しく、

『お上りなされませ、汚ないけれども』といいますから少しは安心して上りました。そして武の案内で奥の間に入りますと、ここは案外小奇麗になっていまして、あんどん行燈の火が

小さくして部屋の隅に置いてありました。しかしまず私の目につきましたのはそこに一人の娘が坐っていることでございます。私が入ると娘は急に起とうとしてまた居住いを直して顔を横に向けました。私は変ですから坐ることもできません、すると武が出し抜けに、

『見てもらいたいと言うたのはこれでございます』というや女は突つ伏してしまいました。私はなんと云つてよいか、文句が出ません、あつけに取られて武の顔を見ると、武も少し顔を赤らめて言いにくそうにしていしましたが、

『まあここへ坐つて下さりませ、私はちよつと出て来ますから』と言ひ捨てて行こうとし

ますから、

『なんだ、なんだ、私はいやだ、一人残るのは』と思わず言いますと、

『それでは坐つて下さらんのか』と言つてこわい顔をして私を睨みました。私が帰るとい
えばすぐにでも蹶けと飛ばしそうな剣幕ですから私も仕方なしにそこに坐つて黙つていますと、
娘は泣いておるのです。嗚咽むせびかえつています、それを見た武の顔はほんとうに例え
ようがありません、額に青筋を立てて齒を喰いしぼるかと思うと、泣き出しそうな顔を
して眼をまじまじさせます。何か言い出しそうにしては口のあたりを手の甲で摩こするのでござ
います。

『一体どうしたのだ』と私も事の様子があんまり妙なので問いかけてました。しますると武
がどもりながらこういのでございます。妹が是非あなたに遇わしてくれと言つて聞かな
い、いろいろ言い聞かしたけどどうしても承知しない、それだからあなたを欺だまして連れて来
たのだ、どうか不憫ふびんな女だと思つて可愛がつてやってくれ、私から手を突いて頼むから、
とまずこういう次第なのです。馬鹿馬鹿しい話だとお笑いもございませうが、全くそう
でしたので、まず私が村の色男になつたのでございます。

そのころ私は女難の戒めをまるで忘れたのではありませんが、何を申すにも山里のこと

ですから、若い者が二三人集まればすぐ娘の評判でございます。小学校の同僚もなんぞと言えどこの娘は別嬪だとか、あの娘にはもう色があるとか、そんな噂をするのは平気で、全くそれが一つの楽しみなのですから、私もいつかその風に染みまして村の娘にかかって見たい気も時々起したのでございます。さすが母の戒めがありますから、うかとは手も出しませんでした、決して心からその実、女を恐れていたのではなく、もしよい機会があつたらきつと色の一つぐらいできるはずになつていたのでございます。

ところで武の妹は不幸と申しまして若い者のうちで大評判な可愛い娘でございまして年はそのころ十七でした。私も始終顔を見知っていましたと言葉を交わしたことはなかったのです。先方では私が叔母の家の者であり、学校の先生ということで遇うたびに礼をして行き過ぎるのでございます、田舎の娘に似わない色の白い、眼のはつきりとした女で、身体つきよくおさよに似てすなりとしていました。城下の娘にもあのくらいなのは少ないなとど村の者が自慢そうに評判していたのですが全くそうだと私も遇うたびに思っていたのでございます。でありますから、私も眼の前にお幸を突きつけられて、その兄から代つて口説かれましては女難なぞを思うことができなかつたのです。それに気の弱い私ですから、よしんば危いことと気がつきましたところで、とてもあの場合、武とお幸を振りきって逃

げて帰るといふような思いきった所作は私にはできないのでございました。

その後は私も二晩置きか三晩置きには必ずお幸のもとに通いましたが、ごく内証にしていましてから、誰も気がつきませんでした。それに兄の武之允が何かにつけてかばってくれますし、また武の女房も初めからよく事情を知っていて、やはり武と同じようにお幸と私の仲をうまくゆくようにのみ骨を折ってくれましたので私も武の家ではおおびらで遊んだものでございます。

二人の仲は武の夫婦から時々冷かされるほど好うございました。かれこれするうち二月三月も経ち、忘れもしません六月七日の晩のことです。夜の八時ごろ、私はいつものようにお幸のもとに参りますと、この晩は宵よいから天気模様そらが怪しかったのが十時ごろには降りだして参りました。大降りにならぬうち、帰ろうと言い出しますと、お幸と武の女房が止めて帰しません、武は不在ゐすでございましたが、今に帰るだろうから帰ったら橋まで送らすからと申しますのでしばらくぐずぐずしてきますと、武が帰って参りました。どこで飲んだかだいぶ酔っていました、私が奥の部屋に臥ねころ転ころんでいると、そこへずかずか入って来まして、どっかり大あぐらをかきました。お幸は私の傍そばに坐まっていたのでございます。

『そとは大変な降りでございます、今夜はお泊りなされませ』と武は妙に言いだしまし

た、と申すのは私がこれまで泊ろうとしても武は、もし泊まって事が知れたらまずいから
 といつも私を宥^{なだ}めて帰りましたので、私も決して泊ったことはなかったのです。

『イヤやはり泊らん方がよかろう』と私の言いますのを、打ち消すようにして武は、

『実は今夜少しばかり話がありますから、それでお泊りなされというのだから、お泊りな
 されというたらお泊りなされ』と語^{ことば}気がやや暴^あらうなつて参りました。舌も少し廻りかね
 る体^{てい}でございました。

『話があるツてなんだろう、今すぐ聞いてもいいじやアないか』

『あなたがついていきますか』と出し抜けに聞かれました。

『何をサ?』私は判じかねたのでございます。

『だからあなたはいけません、お幸はこれになりましたぜ』と腹に手を当てて見せました
 ので私はびっくりしてしまったのでございます。お幸は起つて茶の間に逃げました。

『ほんとかえ、それは』と思わず声を小さくしました。

『ほんとかつて、あなたがそれを知らんということはない、だけれども知らなかったらそ
 れまでの話です、もうあなたも知つてみればこの後の方法^{かた}をつけんじやア』

『どうすればええだろう?』と私は気が顛^{てんとう}倒していますから言うことがおずおずしてい

ます、そうしますと武はこわい眼をして、

『今になってそれを聞く法がありますか、初めからわかりきっているじゃありませんか、あなたの方でもこうなればこうと覚悟があるはずじゃ』

言われて見ればもつともな次第ですが、全く私にはなんの覚悟もなかったので、ただ夢中になってお幸のもとに通つたばかりですから、かように武から言われると文句が出ないのです。

私の黙っているのを見て、武はいまいましそうに舌打ちしましたが、

『すぐ公おもてむき 然しかの女房になされ』

『女房に？』

『いやでござりますか？』

『いやじゃないが、今すぐと言うたところで叔母が承知するかせんかわからんじやないか』
『叔母さんがなんといおうとあなたがその気ならなんでもない、あなたさえウンと言えば私が明日あしたにでも表向きの夫婦にして見せます。なにもここばかりが世界じやないから、叔母さんや村の者がぐずぐず言やア二人でどこへでも出てゆけばいい、人間一匹何しても飯は喰えますぞ！』とまで云われて私も急に力が着きましたから、

『よろしい、それではともかくも一応叔母と相談して、叔母が承知すればよし、故障を言えばお前のいう通り、お幸と二人で大阪へでも東京へでも飛び出すばかりだが、お幸はこれを承知だろうか』

『ヘン！ そんなことを私に聞くがものはありませんじやないか、あなたの行くところならたとい火の中、水の底と来ませア！』と指の尖さきで私の頬を突いて先の劍幕にも似ず上気嫌なんです。

その晩はそれで帰りましたが、サアこの話がどうしても叔母に言い出されないのでございます。それと申すのは叔母も私の母より女難の一件を聞いていますし、母の死ぬる前にも叔母に女難のことは繰り返して頼んでおいたのですから、私の口からお幸のことでも言い出そうものならどんなに驚きもし、心配もするかわからないのでございます、次の朝から三日の間、私は今言おうか、もう切り出そうかと叔母の部屋を出たり入ったりしましたが、とうとう言うことができなかつたのでございます。

叔母に言うことができないとすれば、お幸と二人で土地を逃げる他に仕方がないと一度は逃かけおち亡の仕度をして武の家に出かけましたが、それもイザとなって踏み出すことができませんでした。と申すのは、『これが女難だな』という恐ろしい考えが、次第次第にたか

まつてきて、今までお幸のもとに通つたことを思うと『しまった』という念が湧き上るの
でございます。それですからもし、お幸を連れて逃げでもすれば、行く先どんな苦勞をす
るかも知れず、それこそ女難のどん底に落ちてしまうと、一念こうなりましてはかけおち
もできなくなつたのでございます。

それで四苦八苦、考えに考えぬいた末が、一人で土地を逃げるという見になりました、
忘れもいたしません、六月十五日の夜、七日の晩から七日目の晩でございませぬ、お幸に一
目逢いたいという未練は山々でしたが、ここが大事の場合だと、母の法名を念仏のように
唱えまして、暗やみに乗じて山里を逃亡いたしました、その晩あたりは何も知らないお幸が私
の来るのを待ち焦こがれていたのに違いありません。女に欺のかれてはならぬとばかり教えられ
た私がいつか罪もない女を欺すこととなり、女難を免のがれるつもりで女を捨てた時はもう大
女難にかかつていたので、その時の私にはそれがわからなかつたのでございます。

叔母の家から持ち出した金はわずか十円でございますから東京へ着きますと間もなく尺
八を吹いて人の門に立たなければならぬ次第となりましたのです。それから二十八の年ま
で足かけ十年の間のことば申し上げますまい。国とは音信不通、東京にはもちろん、親族
もなければ古い朋友もないので、種々さまざまのことをやって参りましたが、いつも女の

ことで大事の場合をしくじってしまいました。二十八になるまでには公おもてむき然の妻も一度は持ちましたが半年も続かず、女の方から逃げてしまいました。しかしその妻も私が本郷に下宿しておるうちにその娘とできやったのでございます。

二十八の時の女難が私の生涯の終りで、女難と一しよに目を亡くしてしまったのでございますから、それをお話しいたして長物語を切り上げることになります。

五

二十八の夏でございました、そのころはやや運が向いて参りまして、鉄道局の雇いとなり月給十八円貰もらつていましたが女には懲こりていますから女房も持たず、婆さんも雇わず、一人で六畳と三畳の長屋を借りまして自炊しながら局に通つておったのでございます。

住居すまいは愛宕下町あたごしたまちの狭い路次で、両側に長屋が立っています中の一軒でした。長屋は両側とも六軒ずつ仕切つてありましたが、私の住んでいたのは一番奥で、すぐ前には大工の夫婦者が住んでいたのでございます。

長屋の者は大通りに住む方かたとは違ひまして、御承知ごぞんじでもございませうが、互いに親し

むのが早いもので、私が十二軒の奥に移りますと間もなく、十二軒の人は皆な私に挨拶するようにしました。

その中でも前に住む大工は年ごろが私と同じですし、朝出かける時と、晩帰える時とが大概同じでございいますから始終顔を合わせますのでいつか懇意になり、しまいには大工の方からたびたび遊びに来るようになりました。

大工は名を藤吉と申しましたが、やはり江戸の職人という気風がどこまでもついて廻わり、様子がいなせで弁舌が爽やかで至極面白い男でございました。ただ容貌はあまり立派ではございません、鼻の丸い額の狭いなどはことに目につきました。笑う時はどこかに人のよい、悪く言えば少し抜けているようなところが覚えて、それがまたこの人の愛嬌でございいます。

私のところへ夜遊びに来ると、きつと酒の香をぶんぶんさせて、いきなり尻をまくつてあぐらをかきます。そして私が酒を呑まぬのを冷やかしたものでございます。

そしてまた、しきりと女房を持ってとすめました。そのついでにどうかいたしますと、『君なぞは女で苦勞したこともない唐偏木だから女のありがた味を知らないのだ』とやるのです。御本人はどうかと申しますと、あまり苦勞をしたらしくもないので、その女房

も、親方が世話をして持たしてくれたいかというのでございます。

けれども私は東京に出てから十年の間、いろいろな苦勞をしたに似ず、やはり持つて生まれた性質しよつぶんと見えまして、烈しいこともできず、烈しい言葉すらあまり使わず、見たところ女などには近よることもできない野暮天に見えますので、大工の藤吉が唐偏木で女の味も知らぬというのは決して無理ではなかつたのです。實際私は意気で女難にかかつたというよりか皆んな、おとなしくつて野暮だからかえつて女難にかかつたのでございます。

ある夜のことに藤吉が参りまして、洗濯物せんたくものがあるなら鼻かかあに洗わせるから出せと申しますから、遠慮なく単衣ひとえと襦袢じゆばんを出しました。そう致しますとそのあくる日の夕方に大工の女房が自分で洗濯物を持つて参りまして、これだからお神さんを早くお持ちなさい、女房のありがた味はこれでもわかうと私の膝の上に持つて来たのを投げ出して帰りました。この女はお俊しゅんと申しまして、年は二十四五でございます。長屋中でお俊はいつか噂うわさのぼり、またお俊の前でもお神さんはどう見ても意気だなぞと、賞めほそやす山の神があるくらいですから私の目にもこれはただの女ではないくらいのごときは感じていたのでございます。

藤吉は毎晩のように来るようになりました。それは一ツは私から尺八を習おうという熱

心であつたでございしますが、笛とか尺八とかいうものはうまれつき性質と見えまして藤吉は器用な男でありながらどうしても進歩いたしません。それでも屈せずブウブウ吹いていたのでございませぬ。

お俊も遊びに来るようになりました。初めは二人で押しかけて参りましたが後には日曜日など、藤吉のいない時は昼間でも一人で遊びに来て、一人でしゃべって帰ってゆくようになったのでございませぬ。私も後には藤吉の家に出掛けて夜の十二時まででもくだらん話をして遊ぶようになりました。お俊はしきりに私の世話を焼いて、飯まで炊いてくれることもあり、菜ができると持つて来てくれる、私の役所から帰らぬうちにちゃんと晩の仕度をしてくれることもあり、それですから藤吉がある時冷かしまして、『お前はこのごろ亭主が二人できたから忙がしいなア』と言つたことがあります。けれども藤吉は決して私を疑ぐるようなことはなく、初めはただ隣りづきあいでしたのが後には、なんでも身の上のことを打ち明けて私に相談するようになりました。それですから私もそのつもりでつきあつて、随分やつ力の力にもなつてやり、時には金の用までたしてやりましたのでやつはなお私をまたない友と信じ、二日ばかり私が風邪をひいた時など一日は仕事を休んで私のそばに附いていたことさえございませぬ。

それに長屋中、皆な私を可愛がつてくれまして、おとなしい方だよい方だ、珍しい堅かたじ人じんだと褒ほめてくれるのでございます。ですからお俊ばかりでなくお神さんたちが頼たみもせぬ用を達たしてくれるのでございます。ところがおかしいのはお俊がこれを焼いて、何を私がついているによけいなお世話だと、お神さんたちの目の前でいやな顔をする、それをお神さんたちはなお面白半分に私の世話を焼いたこともありましたが、けれども、それでもつてお俊と私の仲を長屋の者が疑うぐるかというに決してそうでなく、てんで私をば木か金で作つたもののように無類の堅人だと信じていたのでございます。けれどもお俊の方はそれほどの信用はないのです。ですからお俊さんは少し怪しいが、とても物にはならぬなど、明らさまに私に向つて言つた山の神さえいたのでございます。

実際、お俊は怪しいと言われても仕方がありません。ある晩のことに私が床を延べていますと、お俊が飛んで参りまして、

『どうせ私じゃお氣に入りませんよ』と言いざま布ふ団だんを引つたくつて自分でどんどん敷き『サア、旦那様お休みなさい、オー世話の焼ける亭主だ』と言いながら色気のある眼元でじつと私を見上げましたことなどは、ただの仕草ではなかつたのでございます。そしてその時の私の心持を言いますと、決して長屋の者が信じていたほどの堅固なものでなかつた

ので、木や石でない限り、やはり妙な心持がしたのでございます。

私がある時藤吉に向い、『どうもお俊さんは意気だ、まるで素人じゃアないようだ』と申しますと、藤吉にやにや笑っていました。『うまいところを当てられた、実はあれはさる茶屋でかなり名を売った女中であつたのを親方が見つけ出し、本人の心持を聞いて見ると堅気の職人のところにゆきたいというので、それこそ幸いと私に世話してくれたのだ』と少々得意の気味でお俊の身元を打ち明けたのでございます。その時からなおさら私はお俊のそぶりを妙に感じて来ました。

けれどもまず平穩無事に日が経ちますうち、ちようど八月の中ごろの馬鹿に熱い日の晩でございます、長屋の者はみんな外に出て涼んでいました。私だけは前の晩寝冷えをしたので身体の具合が悪く、宵から戸を閉めて床に就つきました。なんでも十時ごろまで外はがやがや話し声が聞えていました。そのうちだんだん静かになりお俊もおとなしく内に引込んだらしかつたのです。私は眠られないのと熱あつ苦しいとで、床を出ましてしばらく長火鉢そぼの傍でマッチで煙草を喫すっていましたが、外へ出て見る気になり寝衣ねまきのままフイと路地に飛び出しました。路地にはもう誰もいないのです。路地から通りに出ますと、月が傾いてちようど愛宕山の上にあるのでございます。外はさすがに少しは風があるのでそこか

らぶらぶら歩いていきますと、向うから一人の男が、何かぶつぶつ口小言を云いながらやつて参ります、その様子が酔っぱらいらしいので私は道を避けていますとよろよろと私の前に来て顔を上げたのを見れば藤吉でございました。

藤吉は私を見るやいきなり、

『イヤ大将、うめえところで遇あつた、今これからお前さんとこへ、押しかけるとこなんだ。サア家へ帰れ、今夜こそおれは勘弁ならんだ、どうしてもお前さんに聞いてもらうことがあるんだ』と私の手を取つてグイグイ路地の方へ引つ張つて参るのでございます。

私も酔っぱらいと思ひまして『よしよし、サア帰ろう、なんでも聞こう』と一しよに連れ立つて家に入りました。

藤吉の顔を見ると凄すじいほど蒼あおざめて眼が坐すわつていたのでございます。坐るが早いか、『サア聞いてくれ、私はもうどうしても勘弁がならんだ』と、それから巻舌で長々と述べ立てましたところを聞きますと、つまりこうなんです、藤吉がその日仲間の者四五人と一しよにある所とこで一杯やりますと、仲間の一人がなんかのはずみから藤吉と口論を初めました。互いに悪口ぞうごん雑言をし合つていますうちに、相手の男が、親方のお古を頂戴してあげたがつているような意久地なしは黙つて引つ込めと怒鳴つたものとみえます。それが

藤吉にグツと癩しやくに触りましたというものは、これまでに朋輩からお俊は親方が手をつけて持て余したのを藤吉に押しつけたのだというあてこすりを二三度聞かされましたそうで、それを藤吉が人知れず苦しめていた矢先、またもやこういうて罵ののしられたものですから言うに言われぬ不平が一度に破裂したのでございます、よけいなお世話だ、親方のお古ならどうした、手前てめえはお古を貰うこともできまいと、我鳴りつけたものとみえます。そうすると相手はあざ笑って、お古ならまだいいが、新しいのだ、今でも月に二三度はお手がつくのだと悪あくたれたのでございます。藤吉はこれを聞きますが早いか、『よし、見ていろ』とすぐそこを飛び出して家に帰るとお俊をたたき出してしまふ了見でぶらぶらと帰る途中、私に逢ったのでございました。

それでこれからすぐにお俊を追い出すつもりだがお前さんも同意だろうと申しますから私はお俊が元親方と怪しい関係のあった女であるか、ないか、そんなことはわからないけれど、今ではお前を大切にして立派なお神さんになっているのだから追い出すほどのことはあるまい、見たところでも親方と怪しいという様子もないようだ、それは私が請け合うと申しますと、藤吉『今でも怪しいなら打ち殺してやるのだ、以前の関係があると聞いただけで私は承知ができねえのだ、お俊を追い出して親方の横よこ面つらを張り擲なぐってくれるのだ、

なんぞといえは女房まで世話をしてやったという、大きな面をしてむやみと親方風を吹かすからしてもう気に喰わねえでいたのだ、お古を押しつけておいて世話も何もあるものか、ふざけるない！』私がいくらなだめても聴かないでとうとう宅うちに帰って参ったのでございます。

私もうつちやつてもおかれないと、藤吉の後について行こうとしますと、かまわないでおいてくれると、私を内に入れません、仕方なしに外に立って内の様子を聴いていました。お俊はもう床に就ついていた様子でしたが、藤吉は引きずり起して怒鳴りつけているのでございませぬ、お俊は何も言わないで聞いていたようですが、しばらくしますとプイと外へ出て参りました。私を見て、

『くだらないこと言つてらア、酔よつぱらいに取り合つても仕方がないからうつちやつておきましよう』と言いなながらズンズン私の宅うちに入るのてございませぬ。私もお俊の後についてうちへ帰りました。

『誰たがくだらないことを焼たきつけたのだらうねえ、ほんとにしようがないねえ』とお俊はこう言つて、長火鉢の横に坐つて、そこに置いてあつた煙草を吸すうておるのです。

『明日の朝になればなんでもないサ』と私もしようことなしに宥なだめていましたが、お俊が

帰りそうにもないので、

『静かになつたようだから見て来たらよかろう』と言いますと、お俊は黙って起つて出てゆきましたから、私はすぐ蚊帳かやの内に入つてしまつたのでございます。ところが間もなくお俊は戻もどつて参りまして、

『よく寝ているからそこから戸締りをして来ました』と澄ましているのです。

『そしてお前さんどうするのだ』と私は蚊帳の内から問いました。

『私はこうして朝まで寝ないでいてやるのサ』

『そんなことができるものか、帰つて寝たがよかろう』と申しますとお俊はじれつたそうに『うちやつておいて下さいよ、酔っぱらいだから夜中にまたどんなことをするかわかるもんじゃアない、私やこわいワ、』と平気で煙草を吸っているのです。私も言いようがないから黙つていますと、お俊もいつものおしやべりに似ず黙つていてでございます、蚊帳の中から透すかして見ると、薄暗い洋燈ランプの光が房ふさ々とした髪から横顔にかけてぽーツとしています、それに蒸し暑いのでダラリとした様子がいつにないなまめかしいように私は思つたのでございます。

そのうち、かれこれ二十分も経ちましたろうか。お俊は折り折り団扇うちわで蚊を追つていま

したが『オオひどい蚊だ』と急に起ち上がりまして、蚊帳の傍そばに来て、『あなたもう寝たの?』と聞きました。

『もう寝かけているところだ』と私はなぜか寝ぼけ声を使いました。

『ちよつと入らして頂戴な、蚊で堪らないから』と言いさま、やつと一人寝の蚊帳の中に入つて来たのでございます。

朝早くお俊は帰つてゆきましたが、どういう風に藤吉の気嫌を取つたものか、それとも酔いが醒さめて藤吉が逆戻りしましたのか、おとなしく仕事に出て参りました。出際でぎわに上り口から頭を出して『お早よう』と言いさま、妙に笑つて頭を搔かいて見せまして『いずれおわびは帰つてから』と、言い捨てて出て参りました。その後姿を見送つて『アア悪いことをした』と私はギツクリ胸に來ましたけれどももう追つつきません。それからというものは、お俊の亭主はほんとうに二人になつたのでございます。

それから一月も経たぬうちに藤吉はまた親方に何か言われて、ブンブン怒つて歸つて参りましたが、今度は少しも酔つていないのです。お俊と別れて自分はしばらく横浜へ稼かせぎに行くと言つた様子はひどく覺悟をしたらしいので、私も浜へゆくことは強いて止めません、お俊と別れるには及ぶまい、しばらく私が預かるから半年も稼いだら歸つて来てまた

一しよになるがよかろうと申しますと、藤吉は涙を流してよろこびまして、万事よろしく頼むと家を畳んでお俊を私の宅に同居させ、横浜へ出かけてしまいました。

もうこうなれば澄ましたもので、お俊と私はすっかり夫婦気取りで暮していたのでございます。

そうすると一月ほどたちまして私は眼病にかかったのでございます。たいしたことあるまいと初めは医者にもかからず、役所にはつとめて通っていましたが、だんだんに悪くなりましてしまいには役所を休むようになりました。医者に見せますと容易ならぬ眼病だと言われて、それから急にできるだけの療治にかかりましたが治る様子も見えないのでございます。

お俊はなかなか気をつけて看護してくれました。藤吉からは何の消息たよりもありません。私は藤吉のことを思いますと、ああ悪いことをしたと、つくづくわが身の罪を思うのでございますが、さればとてお俊を論さとして藤吉の後を逐おわすことをいたすほどの決心は出ませんので、ただ悪い悪いと思いつながらお俊の情を受けておりました。

そのうちだんだん眼が悪くなる一方で役所は一月以上も休んでいるし、私は気が気でならず、もし盲目めくらになつたらという一念が起るたびに、悶もだえ苦しみました。

ここに怪しいことのございますのは、お俊の様子がひどく変ったことでございます、なんとなく私を看護するそぶりが前のようでなく、つまらぬことにかんしゃく疝癩かんしゃくを起して私につらく当るのでございます。そして折り折りは半日もいずれにか出あるいて帰らぬこともあるのです。私は口に出してこそ申しませんが、腹の中は面白くなって堪りません。ところがある日のことでもございました、『御免なさい』と太い声で尋ねて来た者があります。『いらつしやい』とお俊は起つてゆきましたが、しばらく何かその男とこそそ話をしました、やがて私の枕元に参りまして、『頭領が見えました、何かあなたにお話したいことがあるそうです』

なんの頭領だろうと思つていますうちに、その男はずかずか私の枕元に参りまして、『お初はつにお目にかかります、私ことは大工助次郎すけじろうと申しますもので、藤吉初めお俊がこれまでいろいろお世話様になりましたにつきましては、お礼の申し上げようもございません、別してお俊が厚いお情をこうむりました儀につきましては藤吉に代りまして私より十分の御礼を申し上げます。つきましては、お俊儀は今日ただ今より私が世話することになりましたにつきましては早速お宅を立ち退くことにいたします、さようあしからず御承知を願ひ置きます』と切り口上でベラベラとしゃべり立てました、私は文句が出ないのでご

ございます。

それからお俊と頭領がどたばた荷ごしらいをするようでしたが、間もなくお俊が私の傍そばに参りまして、『いろいろわけがあるのだから、悪く思っちゃアいけませんよ、さようなら、お大事に』

二人は出て行きました。私は泣くこともわめくこともできません、これは皆な罰だと思えますと、母のやつれた姿や、孕はらんだまま置き去りにして来たお幸の姿などが眼の前に現われるのでございます。

役所は免やめられ、眼はどうとう片方が見えなくなり片方は少し見えても物の役には立たず、そのうち少しの貯蓄たくわえはなくなつてしまいました。それから今の姿におちぶれたのでございますが、今ではこれを悲しいとも思いません、ただ自分で吹く尺八の音につれて恋しい母のことを思い出しますと、いつそ死んでしまったらと思うこともございますが死ぬることもできないのでございます」

*

*

*

盲人は去るにのぞんでさらに一曲を吹いた。自分はほとんどその哀音悲調を聴くに堪えなかつた。恋の曲、懐旧の情、流転の哀しみ、うたてやその底に永久とこしえの恨みをこめているではないか。

月は西に落ち、盲人は去つた。翌日は彼の姿を鎌倉に見ざりし。

青空文庫情報

底本：「日本の文学 5 樋口一葉 徳富蘆花 国木田独歩」中央公論社

1968 (昭和43)年12月5日初版発行

初出：「文藝界」金港堂

1903 (明治36)年12月

※「路次」と「路地」、「意久地」と「意気地」の混在は底本通りにしました。

入力：iritamago

校正：多羅尾伴内

2004年7月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女難

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>